



久敬舎と観海講堂の学則

亀山雲平顕彰会

代表長野哲

久敬舎

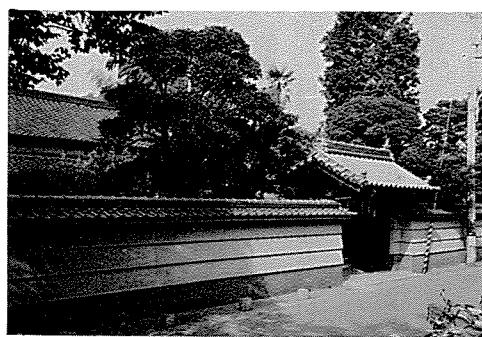
しかし、先ず一番に教育に力を入れていった。

明治三年（一八七〇年）十二月
旧姫路藩領内の神職が集り、神道の修業所を設置する計画があった。家老河合守翁の嗣子河合屏山は仁寿山饗の校舎を提供し、神道修業所とした。則「古学館」である。旧藩士や、藩校の儒学者達が、領内の神社の神官に任命され、教導職についていた。

亀山雲平も、旧石清水八幡宮別宮松原八幡神社に任命され、後に大講義、少教正、神職取締、兵庫県皇典講究所「神職学校」で神戸市和田神社内にあった等多くの教導職の要職に任命され、神道の振興に大いに盡力したのである。

久敬舎とは論語の一節に
子曰 晏平仲 善與人交久而敬之
人と人との交わりは「敬」を以て
貴とする。「お互に尊敬しあつたので、金井利信を教授とし、五

この書院を「久敬舎」と呼んだ。
亀山雲平は先ず、着任するや、
社宅を開放して、一般子弟の訓育
を進めていた。



久敬舎跡（現亀山家）

治十七年（一八八四年）に大きな規模となり、名称も観海講堂と改め、新たに塾則を改正して多くの門人の教育の指針とした。

次のような塾則を制定して、塾生の指導に当った。そして十年後、明治十七年（一八八四年）に大きな規模となり、名称も観海講堂と改め、新たに塾則を改正して多くの門人の教育の指針とした。

久敬舎塾則

久敬舎

課員

舍主兼講究課
亀山雲平

會長兼講究課
金井利信

幹事

當分止宿生舊次ノ者
二員ヲ以テ之レニ充
ツ其員帰省不在ノ時

ハ次員之レヲ攝ス
素讀助手

素讀

會員止宿生ノ内面三
名講究課ノ選ヲ以テ
之レニ任ス但シ通學
生中ヨリ攝スルコト
モアルヘシ

右隔日ヲ以テ其日ノ講
會了リタル上ニテ之レ
ヲ行フ

右三項ハ講究課員教授二
代リテ之レニ任ス素讀ハ
助手之レヲ助ク

久敬舎	
標頭	金井利信
金井利信	亀山雲平
幹事	金井利信
舍主兼講究課	亀山雲平
會長兼講究課	金井利信
幹事	金井利信
當分止宿生舊次ノ者 二員ヲ以テ之レニ充 ツ其員帰省不在ノ時	ハ次員之レヲ攝ス 素讀助手
右隔日ヲ以テ其日ノ講 會了リタル上ニテ之レ ヲ行フ	右三項ハ講究課員教授二 代リテ之レニ任ス素讀ハ 助手之レヲ助ク
右三項ノ外ニ舍ノ内 外ヲ問ハス	但此三項ノ外ニ舍ノ内 外ヲ問ハス
有志ノ者講究課ノ餘 力ヲ窺ヒ講會ヲ請求 セント欲スル者ハ其 人ニヨリ之レヲ講究 課ニ謀リ其諾否ニ任 スヘキ事	同上
一日日本外史輪講同上 午前 但休日ヲ除ク 毎日 ノ外	一日日本外史輪講同上 午前 但休日ヲ除ク 毎日 ノ外
十八史略講義八時ヨリ 十時マデ	十二時ヨリ 十時マデ
順次之レヲ行フ	順次之レヲ行フ

久敬舎塾則（金井利信氏蔵）

毎午後
日但シ休日ヲ除クノ外

同舍
課業
午前 但休日ヲ除ク
毎日 ノ外

一日日本外史輪講同上
午前 但休日ヲ除ク
毎日 ノ外

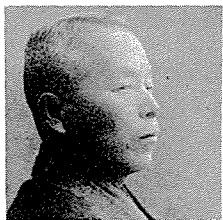
十八史略講義八時ヨリ
十時マデ

順次之レヲ行フ

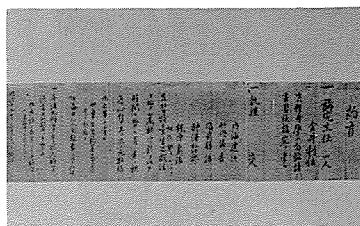
同舍
課業
午前 但休日ヲ除ク
毎日 ノ外

力ヲ窺ヒ講會ヲ請求
セント欲スル者ハ其
人ニヨリ之レヲ講究
課ニ謀リ其諾否ニ任
スヘキ事

右一書一日ニ一書ツ
順次之レヲ行フ



金井利信



約言（金井利孝蔵）

梶原貞治
北條郁二
同五年五
月追加

右ハ習読童生之戲謔ヲ始メ萬端
空談ヲ以テ時間ヲ費ス等ノ事ヲ
相互ニ心付ケ且ツ火ノ元取締向
之事ヲ掌ル。

但童生習読差支候節ハ之レヲ
助勤ス。

右毎日一人宛輪番ヲ以テ行之
但綻ヒ直ニ退塾スルモ返戻セザ
ルモノトス

左ノ擔任者ヲ置ク

右毎日二人宛輪番ヲ以テ行之
但再選スルモ妨ケナシ

右取締幹事ノ任期滿一ヶ月トス
但選幹事ノ任期滿一ヶ月トス

第四條 授業料ハ寄宿生ハ一ヶ月
金六拾錢通学生ハ金五拾錢ツ、
毎月二十日限り取締員へ差シ納

第五條 授業料ハ寄宿生ハ一ヶ月
金六拾錢通学生ハ金五拾錢ツ、
毎月二十日限り取締員へ差シ納

第六條 勉強費ハ塾長ハ塾師ヲ補佐シ塾中
諸般ノ事ヲ總理ス

第七條 勉強費ハ塾長ハ塾師ヨリ之ヲ指命
票ヲ以テ之ヲ選舉シ幹事ハ寄宿
生ヨリ一名通学生ヨリ一名塾師
之ヲ指命ス

第八條 勉強費ハ塾長ハ塾師ヲ補佐シ塾中
諸般ノ事ヲ總理ス

第九條 取締ハ時々塾中ニ來リ塾
中ノ諸事ヲ監察シ学生ノ束脩金
及ビ授業料ノ受渡ヲ掌ルモノト
ス

第十條 幹事ハ事ヲ塾長ニ詢リ學
生ラシテ塾則ヲ履行セシメ塾中
諸雜費ノ出納ヲ掌リ且ツ當番ヲ
立テ本日講會文度向并ニ學生ノ
出入又寄宿生午後五時ヨリ外出
ノ届ケ等ヲ受クベシ本人外出ス

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

觀海講堂跡碑
(白浜小学校内)

觀海講堂塾則

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

第一條 塾塾ハ専ラ漢籍ヲ教授シ
言行方正ニ導クヲ以テ本旨トス
但学生ノ衆望ニヨリ數字ヲ授ク
ルコトアルベシ

第二條 入塾セント欲スル者ハ塾
長ヘ申込ミ塾師ノ許諾ヲ受クベ
シ
但退塾ノ時モ亦同シ

第三條 入塾ノ時ハ束脩金五拾錢
ヲ取締員へ差シ納ムベシ

第六條 勉強費ハ塾長ニ指命ス

鄙情を陳て祝文に換える

節宇龜山先生は博学の君子、神道の教導にして、松原縣社の神官なり、薦名四方に轟き、先生の高徳を聞きて入門を欲する者多し、然るに先生の寓は正しく社の後に在る、其の室甚だ狭からずと雖も、多員の生徒を容れるに能わず、常に私塾の設の缺けたるを恨んで、是において舎長金井兄以下門人若干、之に加へ先生の善き交誼の者を合せて十余名、首唱して各々多少の資金を募り、塾舎の新築を謀る、然りと雖も其の費え亦頗る少なからざる故、首唱者東奔西走し廣く有志者の助成需む、遂に竣を得る、其の功先生の陰徳の致す所なり。

本日開塾の式に行く、先生予め自ら擇ばれし塾名は觀海と号ぶ、

字の如し、鼎の足に似る、即ち謂うに縣社之神章、己に巴の紋を掲ぐるに合す、亦位置、形状神殿を隔て三区相對し、國らずも巴の紋の形に適う、恐らく是れは神靈の導く所歟、果然則ち此の塾舎の冥護を蒙るに仍り長巒の不朽を知るべきなり。

明治十有七年歲次
甲申十月初一日

置塙梅翁謹拜

招待者、松平棟山、芹田月山、岡崎億山、倉本樂山、水越畔南、

長三洲、ほか多数の来賓より地元の置塙梅翁（元大庄屋）が代表して右の祝辞を述べた。

標註弘道館記述義の標註

濱嶋敏雄

一、まえがき

述義そのものは、幾つか活字化されていて、一般に市販されている。しかし雲平評註のものは活字化されいない。そこで評註の一部でも紹介して、雲平の思考の一端に

以上四十歳以下の藩士が対象で、

兵学、音楽、礼法と多岐に亘る教科が置かれていた。

この弘道館の創立に当つて、建学の大意を記す弘道館記を、烈公の命を受けた藤田東湖は、天保八年に起草し、翌九年に完成している。

安政紀元（元年、一八五四）のこと、鈴村の里止、浦茂平が窓を推し開き鍊句をしていた。たまたま門前の通りすがりの旅人が立ち止まり、ぢろりと見て、茂平の句を刪正（改め直す）なす、そのよ

うなことで宿を請われて承諾、止宿した客人、数ヶ月の間、東征西略一去一來無定蹤である。茂

此地後に山を負い、前面は海にし

るやら試みてみたい。

弘道館、これは江戸時代後期水戸藩の藩校である。藩主徳川斉昭（烈公）が藩政改革の一環として企画されたものである。天保十二年（一八四二）に開館され、明治四年（一八七一）の廢藩置県に至る三十年間続いた。

二、松平惇典の序文

古之聖人惟積至誠重忠孝との書き出しで、至誠について諄々と述べ、更に三国史で有名な諸葛孔明の出師表、また普の武帝よりの教師が開いている家塾に入れ、句読、書札などを学ばせ、本館への準備教育とした。本館は十五歳

は大東文化学院の御出身と聞いて

いる。この大学は大正十二年の創立であつて、その創設以来弘道館記述義は必課の書であった。

惇典は数年の後これを聞き、姫路から一里程の処、東湖は徵行だったの直接學を得られなかつたことを惟だ恨む。この頃になると幕勢頗に衰えつゝあつた。東湖藩士を輔翼し、幕政を正すのに艱難辛苦倦くことなく勤めていた。安政二年（一八五五年）の江戸大地震に遭い壓死した。

哀しい哉。

翁は高潔にして氣高い人品、誠忠そのものの人柄である。頑儒のようには見を墨守することなく、時世の変に対してもよき知識により事を處す。

輓近口でのみ尊王を唱え、心に至誠の実なく、たゞ上、下の様子を見まわす者、翁から見ればどうなんだうや。要するに尊王の名と実が相かなうは至誠に發する者この人を言わざして誰があろうか。よって藩主より誠之進の名まで賜わっている。

東湖について惇典はこのように述べている。

浪華の明昇堂主人が弘道館記述

たところ、何も告げずに立ち去つた。暮年（一年）の後水戸藩から尺素（短い手紙）が寄せられた。以前

止宿を懇謝され、初めて藤田東湖であったことを知り得たのである。

惇典は数年の後これを聞き、姫

路から一里程の処、東湖は徵行だったの直接學を得られなかつたことを惟だ恨む。この頃になると幕勢頗に衰えつゝあつた。東湖藩士を輔翼し、幕政を正すのに艱難辛苦倦くことなく勤めていた。安政二年（一八五五年）の江戸大地震に遭い壓死した。

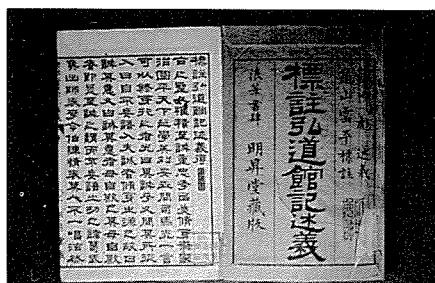
哀しい哉。

翁は高潔にして氣高い人品、誠忠そのものの人柄である。頑儒のようには見を墨守することなく、時世の変に対してもよき知識により事を處す。

輓近口でのみ尊王を唱え、心に至誠の実なく、たゞ上、下の様子を見まわす者、翁から見ればどうなんだうや。要するに尊王の名と実が相かなうは至誠に發する者この人を言わざして誰があろうか。よって藩主より誠之進の名まで賜わっている。

東湖について惇典はこのように述べている。

浪華の明昇堂主人が弘道館記述



弘道館述義

義に就て、患其書多「魯魚」即ち世に出ているこの書 文字の誤りが多い、また注釈もないのに、龜山雲平に乞い、參互校訂且加標註、資料を交えて校訂し標註を加えて梓に上す、序を惇典に嘱せられる。惇典橋村（自分の謙稱）であるが、翁の人となりを敬慕してやまないし、また節宇とは旧知の間柄であり、志の卓れた博学の人である。翁の驥尾につければと思ひ、節宇と左堤右契、手をとりあい、助けあって子弟を導き、古聖賢の至誠忠孝の学を興起せんとして辞せず筆をとった。

明治十六年龍集癸未 時菊倣
晚節楓顕丹心、時は菊が晚節を傲り楓はその赤さを顯す、と結

山雲平に乞い、參互校訂且加標註、資料を交えて校訂し標註を加えて梓に上す、序を惇典に嘱せられる。惇典橋村（自分の謙稱）であるが、翁の人となりを敬慕してやまないし、また節宇とは旧知の間柄であり、志の卓れた博学の人である。翁の驥尾につければと思ひ、節宇と左堤右契、手をとりあい、助けあって子弟を導き、古聖賢の至誠忠孝の学を興起せんとして辞せず筆をとった。

佐幕主義者であったので、明治二年姫路藩戊辰の獄に連なり、家禄没収終身禁固の刑に処せられていた。この時は年寄であった。後赦されて姫路で家塾を開き、二千人に余る門弟があった。

義に就て、患其書多「魯魚」即ち世に出ているこの書 文字の誤りが多い、また注釈もないのに、龜山雲平に乞い、參互校訂且加標註、資料を交えて校訂し標註を加えて梓に上す、序を惇典に嘱せられる。惇典橋村（自分の謙稱）であるが、翁の人となりを敬慕してやまないし、また節宇とは旧知の間柄であり、志の卓れた博学の人である。翁の驥尾につければと思ひ、節宇と左堤右契、手をとりあい、助けあって子弟を導き、古聖賢の至誠忠孝の学を興起せんとして辞せず筆をとった。

佐幕主義者であったので、明治二年姫路藩戊辰の獄に連なり、家禄没収終身禁固の刑に処せられていた。この時は年寄であった。後赦されて姫路で家塾を開き、二千人に余る門弟があった。

んでいる。

龜山雲平 画賛に寄せて

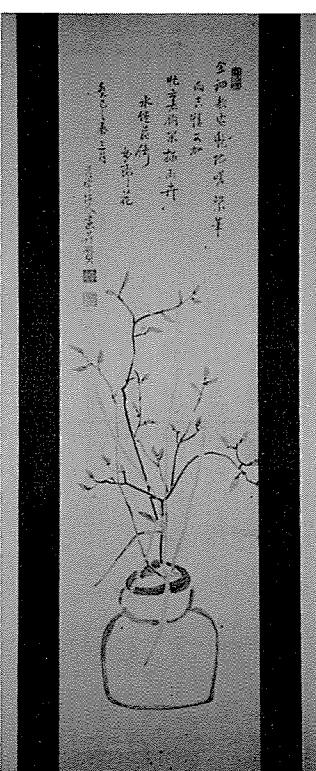
（大西文雄）

今は雲平のきわめてめずらしい画賛の作品を取り上げてみた。小枝を踊らせ、花器は静かに墨をけられている。

今は雲平のきわめてめずらしい画賛の作品を取り上げてみた。小枝を踊らせ、花器は静かに墨をけられている。

今は雲平のきわめてめずらしい画賛の作品を取り上げてみた。小枝を踊らせ、花器は静かに墨をけられている。

今は雲平がこのような態度をとれたのは、彼の人格と学識をよく表し



妹島治作氏藏

聖人雲平の

教養のなせ

るわざか…

みさは高い

し空間表現

別な一面を

垣間見る幅ではないかと思う。

書家

池田善雄

節宇逸話(六)

如何トテ賽々謂々シテ論争セラレタレバ有司モ遂ニ其言ニ伏シタリ故ニ余ノ今日アルハ実ニ龜山先生

シテ罪ニ処セントセシ時龜山先生ハ恰モ大目附ナリシガ當時ノ掛り官ハ勤王志士ヲ一併ニ死罪ニ決定セントス先生正トヲ守リテ勤王ノ輕重ヲ論セズシテ刑ニ処スルハ

ノ輕重ヲ論セズシテ親シク手ヲ下サリシモノモ斉シク死刑ニ処スルハ

最後の左堤石契とは、惇典の姫

路における家塾と、雲平の觀海講堂、共に子弟の教導に携わると言つたのである。また惇典は蓄香軒の南窓で識したとある、この蓄香軒は家塾と関係があるのでなかろうか。

松平惇典は姫路藩士、河合寸翁の外孫にあたる、番頭であり、嘉永二年には好古堂の督學を仰せつけられている。

今は雲平のきわめてめずらし

い画賛の作品を取り上げてみた。

今は雲平のきわめてめずらし

簡素の精神(一)

九州大学名誉教授

文学博士 岡田武彦

麗子像で有名な洋画家、岸田劉生は、古今東西を通じて最も文化人であったのは、中国の宋代人であるといってこれを絶賛した。彼の洋画にはそのためか宋代精神が反映している。ただし麗子像には日本能樂の心が反映しているためか神秘的な雰囲気がただよう

いる。

劉生は何故宋代人を絶賛したのであるか。それは恐らく彼らが簡素の精神にもとづく文化を持っていたからであろう。この文化は表現は単純であるが、内面的精神は深遠で高揚していた。劉生はこ

れに心を惹かれたのである。簡素の反対は繁華である。宋代人は外形の美しさよりも内実の精神を好んでいた。このことは宋代の思想文学反映している。ただし麗子像にはばかりでなく、宋代人が日常使用していた銀器・漆器にもそれが表

明されている。

ただし中國の文化は簡素の精神を本とするものであると簡単に論斷を下してはならない。というの

はそれとは逆に繁華の精神を本と

するものがあるからである。日中兩文化を比較して日本文化を考えると、日本文化は簡素の精神に貫

かれていると断言してよいであろう。ここに日本文化の特色がある。簡素という点によると日本のものは中国のものよりも一層徹底して、その極致に達している感がないで

はないが、日本人としてはこのことはよく念頭におく必要がある。日本人は長い間中国の文化を受用したからといって、安易に同文同種論に溺れてはならない。こうす

ることが日本人が文化的に自主性を持つことになる。文化的に主體性を堅持し、それを異文化との接触によってより向上させていくことが人類の文化に寄与貢献することになるのである。

中国や印度にも簡素の精神にも

とづく文化はあるが、日本ほど透

徹していない。日本と反対の極に

立つのが西洋の文化であり、中國

と印度のものは日本と西洋の中間

に位するといつてよいであろう。

日本文化を貫く簡素の精神に思

いを致すとき、私は日本人はもと

もとすばらしい世界観の持主であ

ると思う。遺憾なことにそれは潜

在的なもので、これを顕在的なも

のとして自覚するという点になる

と、甚だ心もとないものであつた。

しかしこれも西洋的な眼で観ると、

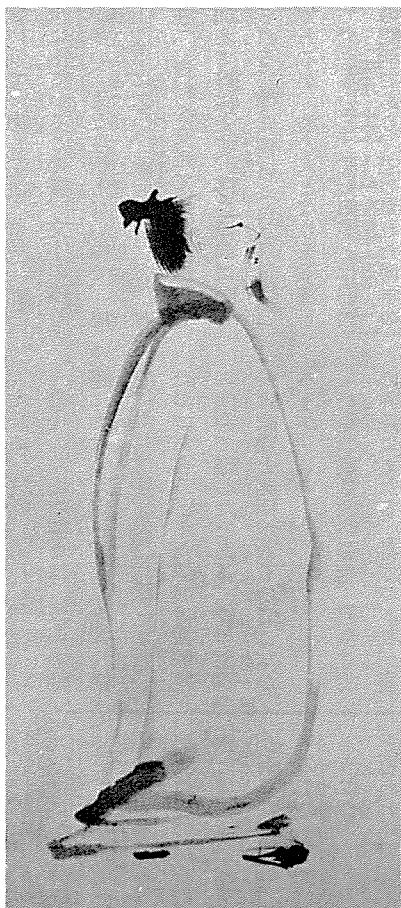
恐らく後進性を免れないものと見

なされるであろう。その真価を理

解するには青い眼でこれを観るよ

うで、日本人の黒い眼で観るよう

に心掛けなければならない。外から



南宋梁楷
李白行吟圖

觀るのでなく内から觀るようにしないが、日本人としてはこのことをよく念頭におく必要がある。日本人は長い間中国の文化を受用したからといって、安易に同文同種論に溺れてはならない。こうすることが日本人が文化的に主體性を持つことになる。文化的に主體性を堅持し、それを異文化との接觸によってより向上させていくことが人類の文化に寄与貢献することになるのである。

繁華な文化は樹木で譬えると枝葉花美である。簡素の文化は根の生命である。したがって徒らに枝葉花美を求めて根本の培養を忘れるならば、樹木は遂には枯死に陥るであろう。前者は西洋的文化、後者は東洋的、特に日本の文化で

ある。前者は發展の文化、後者は回帰の文化といつてよいであろう。前者が輝かしい科学文明をもたらして人類の生存に多大の貢献してきたことは、誰しも認めることである。このことは恐らく将来も続くであろう。しかし回帰して東洋的、特に日本の文化の培根に留意しなければ、人類の生存に意外な弊害をもたらすことは、樹木の譬えが示すように火を見るよりも明らかである。私が東洋、特に日本文化の基調となっている簡素の精神に思いを致す理由の一つはここにあるといつてよい。

簡素の精神といつても思想文芸の各分野によつて異なる。一々これを明らかにしなければその本質は理解できないであろう。

仁寿山饗と白浜地方(一)

元、姫路学院女子短期大学教授

島田 清

一、はじめに

仁寿山饗というのは、姫路藩の名老河合寸翁が、文政四年(一八二二)、仁寿山の山麓、奥山村の背後地に建てた学校である。姫路藩には、「好古堂」という藩立の学校がある。寸翁も、若いときはここで学んだ。藩士の教育は、これでよいのではないか。一應は、こう考えられる。ところが、寸翁は、これとは別に、郊外の仁寿山麓に学校を興した。これはどうして意図からであろう?



河合寸翁像

前の白浜町・糸引村・
八木村にまたがる地域である。この地は、仁寿山饗の南方にひろがる平地で、大部分は農業に従事していた。海岸に接する白浜・木場

では、漁業・製塩等も行われ、東山では窯業を営むものもあった。

このことを説明するには、相当のスペースがある。経緯や経過を述べるにもずいぶん手間がかかる。本稿は、それを述べるのが目的ではないから、總て省き、寸翁が目的としたことを一語で示すと、「人材養成」である。いかなる時代でも、また、どんな場合でも、極言すれば、寸翁ほどそれに熱中した人は、他では見られない、といつていよいのではあるまい。

こうした土地が、仁寿山饗の教育とどのようにかかわっていたか、いや、かかるものとして山饗設立の意図の中に組みこまれていたのか、ということは重要な問題である。しかし、これまでのところ、この問題を取りあげて論じた人はいない。そこで、私は、この問題にスポットをあて、仁寿山饗教育の特色ある一面を究明してみたいと思う。

「人材」が必要なことは誰でも知っている。しかし、それを心の底から感じ取り、その養成に心身を碎いて挺進した人は、案外、少ない。

試筆

元鼎

(説明)

天保二年元旦の試筆

元鼎は、寸翁の別号

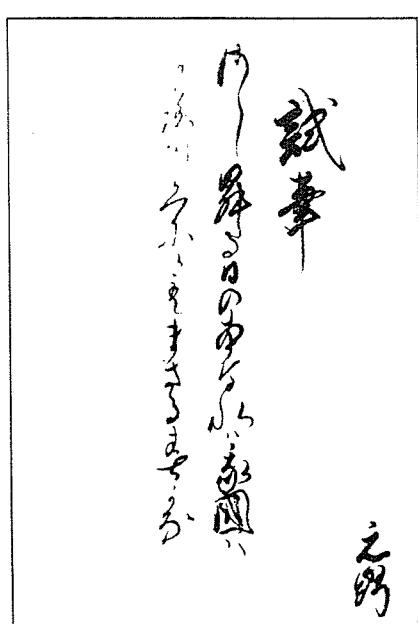
さし昇る日の本なれば我國は
よろづくにもまさる春かな

二、『仁寿山記』

仁寿山饗の設立や、教育思想、その經營方法など、寸翁自ら手書きしたものがかなり残っている。しかし、山饗全体のことまとめた文献はない。これからつくって行くとがむつかしかったからそうなったのであるが、具体的に示すと、姫路市合併以前の白浜町・糸引村・

「白浜地方」といふ呼びかけは、やや漠然としている。簡単に言いあらわすところがむつかしかったからそうなったのであるが、具体的に示すと、姫路市合併以前の白浜町・糸引村・

ない。堤公愷が書いた一文で、総字数九八八字より成っている。漢文で書かれているため読解に骨が折れるけれども、山饗建学の精神から、校地をここに定めた教育的配慮など、山饗教育の重要な問題を明快に論述している。寸翁が書いたもの、あるいは、それに関連して書かれたものには全く出ていない内容であって、教育学者としての公愷のすぐれた見識が遺憾なく



河合寸翁の試筆

姫路藩藩校

好古堂

大西文雄

好古堂の位置の変遷

好古堂は、元禄五年前橋（厩橋）時代に酒井忠拳によって創設されたことは前述した。前年の元禄四年、城内三の曲輪長屋を講堂として「小学」や「論語」を講義させていたが、好古堂は「姫陽秘鑑」巻三十一「前橋学校之事」を見ると、「国学在府城第四郭之中云々」とあり、正式な藩校としての好古堂は城内四の曲輪に創設されたことがわかる。

寛延二年（一七四九）酒井家

忠恭)は姫路に転封された。それにともない好古堂も姫路に移された。『姫陽秘鑑』卷三十一「姫路学校之事」を見ると、
一御家中稽古場惣社御門脇ニ致
出来候ニ付来月一日ヨリ諸芸相初
候間御家中面々前橋之通罷出稽
古可被致候尤肝煎都筑与五右衛門
江引合可被申候以上

の「姫路城下図」や、文化十二年以前のものといわれる「姫路侍屋敷図」を見比べると、その位置は

榎原時代の会所跡であった。

「好古堂御手狭ニ付下馬先屋敷江
御移之御書之事」には、
一承知在之通好古堂手狭ニ候故下
馬先屋敷取繕字問所ニ申付候（中

中下江宿舎を移しそのそばに演武場を設けるなど、藩学統一と文武両道の振興を図るものであった。これは後述する内外情勢の変化にともな

如 宏 時 繼 二 緒



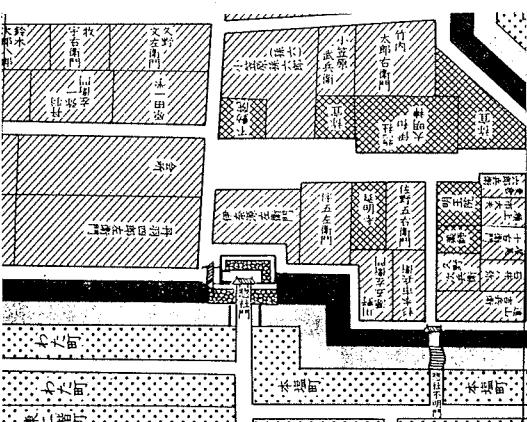
前橋（厩橋）時代の好古堂の位置

とあり、好古堂は姫路城内中曲輪大名町の総社門内に移されたことがわかる。また、榎原忠次から政房の時代、すなわち、慶安二年（一六四九）から寛文七年（一六六七）の間に記されたと思われる「姫路御城廻侍屋敷新絵図」と、酒井氏の時代、文化三年（一八〇〇）

神原時代の会所跡であった。
その後、好古堂はさいてい一度
は場所を移されている。その一は、
文化十三年（一八一六）に大手門
前桜町に移され、その二は、天保
十三年（一八四二）に大手門西方
に移されたものである。
文化十二年の大手門南への移転
は、好古堂定書には
此度好古堂学問所思召以大手前
江御引移付各肝煎被 仰付候云々
とあり、移転理由は記していない。
しかし、『姫陽秘鑑』巻三十一の

馬先屋敷取締書問所ニ申付候（古略）時節柄之儀萬先々手輕ニ可申付なれとも學問筋之儀は何寄大切之事にも候間（後略）とあり、質素儉約の時節柄であつて、学問は人材育成上大切であり、好古堂が手狭になつたので、その規模の拡張を図るものであつたことがわかる。

好古堂の位置については、史料や先行研究が少なく定かでないが、姫路に移ってからの位置はこれ以外の場所に動いた可能性も残る。



姫路御城廻侍屋敷新繪図（解説図）

紓社財內會所付近



姫路侍屋敷図の好古堂の付近